

令和２年度秋田県総合政策審議会第１回ふるさと定着回帰部会（議事録要旨）

１ 日時 令和２年７月１０日（金）１５：３５～１７：００

２ 場所 正庁

３ 出席者（敬称略）

【ふるさと定着回帰部会委員】

加藤 未希（合同会社ＣＨＥＲＩＳＨ代表社員）

須田 紘彬（株式会社あきた総研代表取締役）

竹内 健二（株式会社ＬＨＬ取締役）

能登 祐子（能代市自治会連合協議会会長）

【県】

石黒 道人（あきた未来創造部次長）

久米 寿（あきた未来創造部次長）

水澤 里利（あきた未来創造部あきた未来戦略課長）

佐藤 裕之（あきた未来創造部あきた未来戦略課政策監）

三浦 卓実（あきた未来創造部移住・定住促進課長）

信田 真弓（あきた未来創造部次世代・女性活躍支援課長）

新号 和政（あきた未来創造部次世代・女性活躍支援課政策監）

橋本 秀樹（あきた未来創造部地域づくり推進課長）

村田 詠吾（企画振興部市町村課長）

川辺 透（建設部技術管理課長）

栗田 亨（建設部都市計画課長）

佐々木寿一（建設部参事(兼)下水道マネジメント推進課長）

４ あいさつ（石黒あきた未来創造部次長）

- ・ 当部会は第３期ふるさと秋田元気創造プランの戦略１として、人口減少対策を中心にまとめた「ふるさと定着回帰戦略」について、委員の皆様から来年度に向けた御提言をいただくため、開催するものである。
- ・ 本県の人口は約９５万人に減少しており、その減少率も７年連続で全国最大となるなど、依然として極めて厳しい状況にある。
- ・ 人口減少対策に特効薬はなく、総合的で粘り強い取組が必要になるが、県では大別して、①結婚・出産・子育て環境などの自然減対策と、②若者定住や回帰・移住などの社会減対策、さらには③人口減少下でも安心して暮らすことができる地域づくり対策の３方向

から取組を進めている。

- ・ 昨今の動向を見ると、自然減対策については婚姻数の増加など取組の成果も見られる一方で、年間の出生数が5千人を切るなど、厳しい状況が続いている。社会減対策については社会減自体が縮小しているほか、移住者数などの指標が改善傾向を示している。
- ・ この中で、県が特に問題意識を持っている点は出生数の減少で、これには若年女性層の県外流出が大きく影響していることから、本日はこの点について、特にご意見をいただきたい。
- ・ 各分野毎の取組については、後ほど担当課長から説明があるが、こうした現状のほか、昨年末に発生した新型コロナウイルス感染症は、地球規模で人々の生活や経済に影響を与えており、これは第3期プランの策定時点、あるいは昨年度の部会開催時にはなかった要素になる。
- ・ コロナ感染が定住や回帰に及ぼす影響としては、過密となった大都市から地方への回帰の機運が高まるとともに、リモートワークを活用した新しい働き方の普及などが進展しつつあり、こうした時代の流れをどのように活用し、本県への定着や回帰に結びつけていくのかも大事な方向性となる。
- ・ これまでの取組や成果、さらには皆様が肌で感じている社会の変化などを踏まえながら、忌憚のない御意見を賜るようお願いして、開会の挨拶とさせていただきます。

5 委員の紹介

6 事務局紹介

7 部会長あいさつ

- ・ ふるさと定着回帰部会には2年前から参加させていただき、これからの秋田県を創る非常に重要な取組の一つと感じている。
- ・ 先ほど審議会でも話したが、他の部会との連携や考えるべきことが多い部会だということも改めて認識をした。
- ・ 今年から就任いただいた委員の皆さんと県の各部門の皆さんと連携をしていきたい。
- ・ 更にコロナにどう対応するか、対策ということではなく、先を見据えた事業を考えられるように自分たちの専門性と人脈を生かしながら皆さんと協議を進めていきたいと思う。本日はよろしくお願いします。

8 議事

(1) 専門部会の進め方について

□事務局

部会のスケジュール等について、総合政策審議会資料3及び部会資料－1により説明

●須田紘彬部会長

- ・ 進め方の関係で、質問、意見はあるか。

(なし)

(2) 第3期ふるさと秋田元気創造プランにおける戦略1の令和2年度の実施について

□三浦移住・定住促進課長

□信田次世代・女性活躍支援課長

□橋本地域づくり推進課長

主要な事業について、部会資料－2、3により説明

●須田紘彬部会長

- ・ 最初に自己紹介も兼ねて、普段どういう活動をされているかなどを紹介していただきつつ、ただいまの県の説明について、委員の皆様から御質問や御意見をいただきたい。
- ・ まず私から自己紹介させていただく。私は、7年前にいわゆるAターンをして起業し、高校生・大学生の就職支援といった個人のキャリアについて考えるところから事業をスタートさせた。私の場合は結果的に起業を選択したが、東京などの県外で得た経験をどのように秋田で生かすのか、企業に就職するという選択も含めて非常に悩んだ。
- ・ 実際に秋田に戻ってきてからは、新しいことや地域のことに取り組むことの難しさ、周囲の理解を得にくいことや、経済的に継続が難しいことを実感したが、いかに地域や人、若者同士の繋がりを作り、維持していくかが鍵であると感じている。課題も多くあるが、私の場合、人の縁や周囲の環境に非常に恵まれて、今に至っていると感じている。
- ・ 1歳になる子供がいるが、私自身、昨年5月に1ヶ月の有給休暇を取得して育児を行った。もちろん今も子育てをしているが、秋田は東京よりも子育てしやすい環境だと実感している。
- ・ 一方で、保育士のあり方など社会システムの部分や、昔ながらの子育てと今の子育ての仕方の違いについて、いろいろと考えさせられることもあった。この部会での審議を通して、今一度どういう形がいいのか、考えていきたい。
- ・ 東京と秋田を都市として比較しても、秋田は東京にはならない。東京と秋田のどちらがいいかという話ではなくて、どういう人はどういうところがいいのかということを考えるべきだと思う。こういう人にとっては秋田のこういうところが適しているとか、適切な情報提供をしていくべきだと考えている。
- ・ そういった情報を発信する場合は、我々一人一人の地域への思いが重要であり、生き生きと働き、生き生きと暮らし、楽しく充実した生活を送っていることを我々自身が実感していることが大事だと思っている。

- ・ そういった情報発信などを行う、私の会社が県から受託した事業がいくつかあるが、その活動の中でもこのスタンスを守りつつ、参加する方や、若者や女性といった情報発信の相手方となる方々の思いや不安に寄り添って活動していきたいと考えている。
- ・ 本部会を通して、他の部会との連携も図りながら、次の世代に向けた良い取組がしたいと思っているのでよろしくお願いします。

●加藤未希委員

- ・ 秋田市茨島にある秋田アスレティッククラブの一室を拠点として、子育て中のお母さんも子供もストレスなくゆっくりご飯が食べれるような場所を提供したいとの思いから、親子カフェを運営をしている。
- ・ 赤ちゃん向けのベビーマッサージや、お母さんにリフレッシュしてもらうためのエアロビクスやヨガ教室なども開催している。見守り託児をつけてゆっくり過ごしてもらえる環境を整えている。
- ・ 昨年4月、チェリッシュ保育園という小規模認可保育園を開設した。
- ・ たくさんの県内のママ達に情報を伝えたいという思いで、フリーペーパーの子育て情報誌も発行している。
- ・ 以上、主に4つの事業を運営しており、保育園の設立をきっかけに、法人化して、合同会社CHERISHを経営している。
- ・ 私には今、小学5年生と3年生と、もう少しで3歳になる子どもがいる。22歳と若いときに、周囲の友人よりも早く結婚、出産したこともあり、友人はみんな日中はバリバリ仕事をして夜は遊びに行っているというような頃に、私は、日中は子育てをして夜9時には寝るというような生活を送っていたので、自分一人取り残されたような気分になっていたが、その頃に出会ったのがママ友の存在だった。
- ・ 「私だけじゃないんだなあ」とか、「みんな頑張ってるんだな」という共感というか、気持ちを共有してもらったことですごく救われた。そういったママたちたくさんいるんじゃないかと思って、自分も子育てしながら何かできることはないか、子育て中だからこそできることを考えてみようと思ったのがきっかけで、2012年にサークルとして活動を始め、もう少しで8年になる。
- ・ 子育て中のママとしての意見や、働く女性としての意見、運営しているカフェや保育園に来てくれてるお母さんたちの生の声をお届けできればと思っている。

●竹内健二委員

- ・ 神奈川県出身で、2014年の春に神奈川県の鎌倉から秋田市に妻と子供4人の6人家族で移住してきた。
- ・ その1年半後の2015年の夏に秋田市から五城目町に県内で引っ越しをし、それこそ先ほどの橋本地域づくり推進課長からの説明の中のコミュニティビジネスのところで出

てきた地区、五城目町の奥の方の馬場目地区という山の中に住んでいる。

- ・ もともととは株式会社ラウンドテーブルという会社で中小企業の組織を良くする仕事、コンサルティング事業や研修事業等を行ってきた。今もその活動は継続しているが、取組をより加速したいと考え、現在は株式会社LHLで女性の自立支援の仕事をしている。
- ・ LHLという会社は、女性の方はピンと来ると思うが、具体的には顔の肌質改善ためのサロンを全国で75店舗展開している、名古屋に本社がある会社である。
- ・ そのLHLにラウンドテーブルの一部の事業を売却し、今は秋田と名古屋で女性の自立支援事業に取り組みつつ、県内の中小企業の支援も継続して行っている。
- ・ 妻は、東京の出身だが、現在住んでいる五城目町には地域に空き家があることから、そういった使っていないスペースを活用して、子育てに関するイベントや、フラダンスを踊ったり、キッチンもあるのでクッキー作りのためにスペースとして貸したりするなど、いろいろなイベントを開催する「んなのいえ」という施設を運営している。
- ・ この会議には初めて参加したが、部会長から話があったとおり、部会間の連携が大変重要になると思っている。
- ・ 一生活者として県外から秋田に来て6年になるが、まだ外からの視点も残っているので、これまでの経験を生かして、いかに総合的かつピンポイントで核心をついた施策を提言としてまとめられるかというところに邁進していきたいと思っている。

●能登祐子委員

- ・ 長野から嫁ぎ40年近くになる。以前は専業主婦だったのでPTAのことくらいしかわからなかったが、平成16年から自治会長になり、それからずっと替わる人がおらずに長く続いている。
- ・ 平成16年から地域活動に従事してきたが、女性部を作ったことから、まちづくり、地域づくりが進んでいったということがあった。
- ・ 今は自治会が本当に高齢化して衰退しつつある。一方で、特に防災にも力を入れているのだが、単独の自治会では自主防災活動を担えない状況になっており、3年前に第一自主防災協議会という組織を10の自治会が集まって作り、連携をとりながら活動している状況である。
- ・ 生産者と私たち町に住む者が連携して朝市の開催を十数年続けてきたが、その分高齢化が進み、生産者だけではなく我々消費者の方もどんどん人が減ってきた。
- ・ そういう状況の中で、NPO法人常磐ときめき隊と協働で「ときめきマルシェ」を3年前から始めた。昨年までは6月から11月まで開催していたが、「今年は早くやりましょう。5月からがんばりましょう」と皆で話し合っていたところに、コロナウイルスの影響があって、全く開けない状況になってしまった。
- ・ その後、皆でどうするか話し合ったが、「やりたい」ということになって、先週からま

ず朝市を再開した。

- ・ 一方、マルシェはもう少し待つことにしていたが、今年で終了する予定だった能代の一番のにぎわい創出行事「おなごりフェスティバル」がコロナの影響で中止になってしまったこともあり、その「おなごりフェスティバル」の開催予定日だった9月12日の夜からマルシェを再開することになっている。
- ・ マルシェは、高齢化が進む中で若者たちの発想や力がどうしても必要だと思い、現在は若者と連携して開催している。
- ・ そういった活動の中で、移住者の方々とも関わるようになったが、よそ者の発想というのは地域にとって必要であり、ありきたりな言葉だが、若者のパワーと女性の力がとても重要だと思っている。
- ・ 以前から思っていたことだが、先ほどの県の説明を聞き、ふるさとあきた元気創造プランを拝見して素晴らしいプランだと感心するばかりであった。
- ・ ただ、このプランが絵にかいた餅にならないように、どのように実践していくかを皆さんと一緒に考えながら進めていきたいし、県民の一人としてどのように意識を変えていくか考えつつ、県民と行政のパイプ役になりたいと思っている。
- ・ 田舎暮らしは今回のコロナの影響で見直され、地方への回帰が進むと思うが、田舎には地縁があり、非常に難しいデリケートな面がある。物事への触れ方、踏み込み方、そういうところが都会とは全く異なり、一歩間違うととんでもないことになることもあるので、私は、新しい事業を進めていく際は、特にその辺に配慮して慎重に進めているが、初めに共通理解を作ることが肝要であり、話し合いを繰り返すことがとても重要だと思っている。
- ・ いろいろなジャンルのマルシェを見て、異業種、そして移住者の方々といったいろいろな層の方達との連携がとても重要だと感じている。その連携を継続して進めていくことで、地域をよくしていきたいと思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 県の取組についての質疑応答、もしくは意見だけでも構わないので、審議を進めていきたい。皆さんの取組の中で、「私はこういうふうに取り組んでいるが、県ではどう考えているか」などでも構わないと思っている。
- ・ 能登委員の今の話の延長になるかと思うが、若い人との連携を始めたという話があった。若者との連携を進めたり、新しいことを進める上で気をつけなければいけないことのひとつとして、地縁というものもあるというような話だったが、実体験を元にどのように取り組まれていたか、伺いたい。

●能登祐子委員

- ・ 新しいことを始める際はまず身内で話し合い、それから、関係する地域の人などに話

を持っていく。実体験としては、その際の順番について、「まずどこの誰々さんに話を通さないとまずい」といったことがある。それを怠ると、あとでとんでもないことになっていく場合もあるので、そういったことには気をつけないといけない。やはり、すべてにおいて、私は、「人」が重要だと思っている。最終的には人の繋がり、物事が進むか、進まないかが決まるので、それを重視していかないと、物を相手にするように自分たちが計画したとおりに物事をすぐ進めようとするとうまく失敗する。

- ・ うっかり話し忘れていたが、私は8年前からコミュニティビジネスに取り組んでいて、「夢工房咲く咲く」という地域コミュニティの店舗を開設している。
- ・ コミュニティビジネスなので、利益追求でもなく、ボランティアでもなく、その中間を目指したが、それはすごく難しいことだと今は痛感している。利益と社会貢献のバランスをうまくとっていかなければいけないが、利益が生まれないところには、やはり発展はないと思っている。
- ・ 何事をするにも我々は自己負担になるが、我々の活動の中には若者支援の要素もたくさんあるし、出会いの場でもある。そういった活動に対する支援を私達がうまく使わせていただけるような状況を行政に作っていただけるとありがたい。

●須田紘彬部会長

- ・ 地域活動の継続にはどうしても経済的な支援が必要になってくる。しかし、県の予算も限られている中では、県外から外貨を稼ぐような取組も必要になってくると思うのだが、そのあたりについては他の部会とも連携が必要ではないか。
- ・ 資金、人、情報をどのように集めていくか、今後、議論していかなければいけない。
- ・ NPOなど、利益と地域ビジネスの関係については、どちらとも言えない中間的な動きが地域の中で必要ではないか。
- ・ 第3期ふるさとあきた元気創造プランにも記載されているが、その中間的な動きが求められている部分の一つが、20代30代女性なのではないか。
- ・ 東京で生きるのか、地方に戻るのか、子育てに力入れるのか、仕事に力入れるのか、そういったいろいろな事柄がどちらにも振れないような状況に対して、もしくは、それらを両立しなければいけないという視点で、県では、結婚、出産、子育てに対する支援に注力したいのではないかと個人的に感じているが、加藤委員はどのような意見をお持ちか。

●加藤未希委員

- ・ 出産して子育てするということは、やりたいことがやれなくなってしまう、自分が犠牲なことだという勝手なイメージが、私自身すごく強かったし、周りにもそう思われていた。
- ・ 実際、22歳で妊娠、出産して、どうしたらいいか全くわからないまま子育てをして

いて、毎日パジャマ姿のままのボサボサ頭状態でいることが多くて、そういう状態を友人が見て、「いやあ、大変そうだなあ。子育てなんてうちにはまだ早いなあ」と思われていたと思う。

- ・ 実際に子育てをして私自身が感じたのは、自分が犠牲になるという感覚ではなく、自分自身も楽しく子育てをしていれば、子供も自然と笑顔になれるということであった。
- ・ 仕事と子育てを両立している姿をたくさんの人たちに感じてもらえれば、自然と子育てに対する意欲や、仕事と子育てを両立する意欲が高まってくるのではないかな。
- ・ 私自身、日頃の活動の中で、皆さん子育て真っ最中の参加者のママたちから、「子供を育てながら働いていて、すごく憧れる」という嬉しい言葉をいただくことが多い。そういう形で、「この人がやってるんだから、私も頑張ろう」とか、近くのママを見て、自分も頑張ろうと思ってもらえるのはすごくいいことだ感じた。
- ・ 都会に行った友人達からは、「周りがバリバリ働いているから、私もまだ結婚はいいかなあ」という声を聞くが、秋田で子育てと仕事を両立している一般的なママたちが増えて、そういった人たちの姿を次の人たちに见せていくことができれば、「秋田での子育ては楽しい」、「秋田は、自分のやりがいを持って、仕事も両立できる場所だ」というアピールができて、理想的な好循環が生まれるのではないかな。

●須田紘彬部会長

- ・ 加藤委員の活動は、現在、企業という形になっているが、それは当初から意図していたものか。

●加藤未希委員

- ・ サークル活動として取組を始めたときは、自分たちが働きやすい環境を整えたいということがまず一つの目標であったが、自分たちの子育てをきちんと充実させた上で、なおかつ、きちんと仕事として運営できることを常に目標としていた。この8年間はすごく大変ではあったが、それこそ、人との繋がりに恵まれた環境だった。カフェを開くことができたのも、今継続できているのも、応援してくれる企業があったことが大きく寄与しており、ファミリー層や子育てを応援したい秋田の企業がたくさんあると今すごく実感している。

●須田紘彬部会長

- ・ 今は、子育てを応援してくれる企業も多いとは思いますが、会社として女性の働きやすい職場環境を整えると一口に言っても、売り上げや労務管理の面からなかなか難しい企業も多いと思う。組織として、女性がより働きやすい職場環境を整えるためには、何が大事か、竹内委員からその辺の話を伺いたい。

●竹内健二委員

- ・ 私がお付き合いしている秋田県内の中小企業の事例からすると、結論から言うと、限界があるという認識は直感として持っている。
- ・ 育休などについては国がいろいろな支援制度を設けているが、女性が働きやすい組織を作ることに限っては、大企業で導入されるイメージの制度であって、私がお付き合いしてる中小企業においては、「考え方はわかるけど、実際には無理だよね」という感覚だと強く感じている。
- ・ 加藤委員の事例も該当するが、女性が起業していく、自立をしていくというところにヒントが一つあるのではないかな。
- ・ 先ほど自己紹介のときに話した名古屋に本社がある全国サロンを展開している企業では、75の店舗があり、シングルマザーの方も含めて75人の女性が個人事業主として自立して食べていけている。
- ・ 中には、月に200万ぐらいの売り上げを上げていて、経費を50%差し引いても、月に100万円の所得があるということで、朝10時に開店して、午後5時半には店を閉めて、子供の送迎をするという生活が実現できている。この事例は名古屋のど真ん中ではなく、愛知県の西三河という、はっきり言って田舎の田んぼがたくさんあるところの話である。
- ・ そういった生活を実現するためには、食べていくために働くという考え方から、好きなことを仕事にしたいということを、理想論ではなく、本気で推し進めていくという考え方への転換が必要だと考えている。
- ・ 女性の活躍を支援するセミナーを開催する場合も、子育てや育休、ワークライフバランスといった観点ではなく、好きなことを突き詰めていくということを深掘りするような新しいタイプのセミナーが、もしかしたらもっと必要なのかもしれない。
- ・ 一方で、1人の女性が起業していくプロセスは、結構大変である。サロンを作る場合でも、最低でも300万円ぐらいの資金が必要になってくるので、1人の女性が、日本政策金融公庫に行って、「お金を貸してください」と言っても絶対貸してくれません。そういった場面を何か期待値を込めて行政が支援できる仕組みを作れないか。
- ・ いざ事業を始めた後、専門家派遣制度などいろいろな支援制度を整えているが、伴走して支援していく仕組みがどこまで整えられるのかが重要である。
- ・ 一つのヒントとしては、先ほど信田次世代・女性活躍支援課長から話があったように、女性の県外流出による社会減や、出生数の減少というテーマがある。県から出ていくタイミングではなく、逆に戻ってくるタイミングとしては、いいのか悪いのかわからないが、シングルマザーになった瞬間に、田舎に目が向く。
- ・ その人たちが確実に戻ってこれるような施策、方針というもの、一つの重要なテーマである。
- ・ 実際にそういう形で五城目町に戻ってきて、自分でお花のアトリエをやって、生計を立

てながら頑張ってる人もいらっしゃる。そういうところにもっと光を当てて、施策として支援していくことが必要ではないか。秋田県は、もし、1人になったとしても、秋田県に帰ればやっていけそうな気がするという雰囲気を作るのも一つの手ではないか。

●須田紘彬部会長

- ・ 起業という経済的な自立が大きなポイントではないか。そのときには明るい話ではないかもしれないが、例えば、専業主婦の方が離婚することになってしまった際に、どのように自立するかという懸念はあると思う。親族などの身内で支え合うということも必要だと思うが、その人が人生を一個人として自立できるかという観点も必要ではないか。
- ・ 能登委員も先ほどおっしゃっていたように、最初は専業主婦だったところから、地域社会に出て人脈もできて、地域に必要なものが何かという視点で地域ビジネスに取組を進められるという好事例ではないか。
- ・ そういう取組を通じて、「もう少しこういう支援があればいいな」とか、「逆風だな」と感じたことでもいいと思うのですが、そういうことはありませんか。そういったことに関して、新しい施策で改善できればいいと思うのですが、今までの取組の中で一番大変であったことは、どういったところか。

●能登祐子委員

- ・ いろいろあるが、もう何十年も前、地域活動に取り組み始めたころ、周囲の方々に「よく地域活動に手をつけたね」と言われた。最初は何のことかよくわからず、若かったのどにかく取組を前に進めていった。今になってようやく、その言葉が本当だったということが分かった。いろいろなことを開始して、いろいろなことを経験してわかることがとても多い。今は地域ビジネスはすごく大変だ思っている。
- ・ 具体的には、やりたいことがたくさんあるが資金がないということがある。
- ・ 今がまさにそうなのだが、最近、民間の女性8人でビールを作った。例えば、企業が付いていれば楽だったのかもしれないし、逆に大変だったから良かった面もあるが、経験していかないとわからないことがたくさんある中で、行政から様々な場面で臨機応変にサポートしていただければありがたい。
- ・ 行政側からは、「補助金を当てにして事業をしては駄目でしょう」と言われることがあるが、そういうことではない。上から目線ではなく、一緒の目線で手を貸す姿勢が必要ではないか。
- ・ まちづくり、地域づくりは、行政主導ではなく、民間が主導しないとうまくいかない。民間の取組をサポートする体制づくりをお願いしたい。
- ・ 何かアクションを起こすというのは本当に大変なことだと感じている。本日お集まりの委員の方々はアクションを起こすどころか、起業していらっしゃる。子育てしながら

ら、起業して事業を継続しているなど、私の時代には考えられなかったこと。

- ・ 今の時代は、たくさんの仕事を兼業するという形もあるので、そういうことに対するサポートもお願いしたい。
- ・ 行政の支援情報が足りないと感じている。今の時代はネットで検索すればいろいろな情報が入ってくるとは思うが、身近なところに相談できる方がいるというのは心強いと思う。行政に身近な存在になっていただくのと同時に、私たちもさっき言ったように意識を変えないといけない。
- ・ 何もしない若者たちもたくさんいる。そういう人たちが変わっていける環境を我々も作っていかなければいけない。
- ・ 20代30代の女性たちがどんどん県外へ流出していっていることが一番の問題ではないか。私は能代市のまち・ひと・しごと総合戦略の会議にも参加させてもらっているが、先般まとまった内容には、若い女性たちの県外流出に歯止めをかけるために、若い女性たちにとって良い環境を作っていくことが盛り込まれている。県も、具体的に実践するためにはどうしたらいいかを一緒に考えていかなければならないのではないか。

●須田紘彬部会長

- ・ 20代30代の若い女性たちがなぜ出ていくのか、進学や就職を機に転出していると言われるが、それ以外の部分で、秋田に居づらさがないのか、統計などのデータから示すことができないかと考えている。
- ・ ふるさと定着回帰部会という名前のおり、秋田にどうやって戻ってきてもらうか、もしくはもっと定着してもらおうかという点を考える必要が多分にあると思うが、いったん進学・就職で県外に出てしまった方が秋田に戻るタイミングはいくつかあると思っている。
- ・ 竹内委員がおっしゃったように、シングルマザーになって、子育てと両立するにはどうしても親の力を借りなければいけないということもあると思う。いつ帰ろうかとずっとタイミングを探っている方も多くいるし、秋田県出身の女性の方が県外の男性を連れて戻ってくるということも多分にあると思う。いつどのタイミングで帰ってくる事例が多いのかを探れるような取組として、いわゆる関係人口に関する取組などを通じて、秋田へ帰ってくる機会を創出していくべきではないか。
- ・ 単にイベントへ参加してもらっただけではなく、どういう形で関わってもらった方がいいかは、関係人口の取組を進めていく上で考えていかなければならない。
- ・ 先ほど竹内委員もおっしゃったが、秋田へ戻る人は一体何に困ってどういうタイミングで戻りたいのか、よく研究する必要がある。それが経済的な事情なのか、もしくは家族関係のタイミングなのかによって、秋田に戻ってきてもらう時の支援として生活面のサポートもできたらいいのではないか。

- ・ 今はコロナを契機とする事例もかなりあると思われる。安全な場所で子育てしたいという考えから、親が近くにいるから安心といったことなど、いろいろな要素があるのではないか。
- ・ 加藤委員にお聞きしたいが、子育て上、ママ達が一体何に困っているのか、生の声を教えていただけないか。

●加藤未希委員

- ・ チェリッシュに来てくれていたママたちの中には、ご主人の転勤で秋田を離れた方もいらっしゃるが、秋田での子育てがすごく楽しかったとわざわざ連絡をいただいたりする。
- ・ 今はコロナの影響でイベントなどはなかなかないが、以前はカレンダーを見ながら、今度はどこに遊びに行こうかと楽しんでいるアクティブなお母さんたちがたくさんいて、「月曜日はここ。火曜日はここ」と、本当に皆さん楽しそうに、秋田での子育てを満喫していた。
- ・ 10年前は、子育て関係のイベントはあることはあったがすごく少なく、この10年で秋田市の無料イベントが増えたり、アレルギーを持つ子どものママたちの集まりや、転勤族のママたちの集まりといった形で、しっかりとターゲットを見定めたイベントが増えた。
- ・ 同じ子育て中のママでも興味のあることは人によって全然違ったりする。1人目の子どもを持つママの考えと、2人目3人目を出産したママの考えは違う。そういうところを限定して集まったりすることで、その場を通じてすぐ仲良くなるという話をよく聞く。
- ・ この10年で、イベントや集まる場所がすごく増えていると感じているが、結構、秋田市が多くて、チェリッシュに来られる方の中には、天王や本荘方面など、結構、市外から来られる方が多い。
- ・ 秋田市でのイベントや集まる場所が充実しているということで、市外のママたちからは、横手でももっとこういうイベントや場所があればいいのになといった声を聞くことがある。
- ・ 秋田での子育てが楽しいと言ってくれるママがとて多いと感じている。
- ・ チェリッシュに来てくれるママたちの中には、2人目3人目が生まれたとまたいらっしゃってくださるリピーターもすごく多い。
- ・ チェリッシュのスタッフも毎年のように誰かが妊娠していて、子どもを4人、5人と持つママがたくさんいる。そういう人たちを身近に感じていると、私も「ああ、もう1人産みたいな」とか、「もう1回子育てしたいな」と考えるようになる。
- ・ 私自身、1人目、2人目の子育てのときはいつも忙しくて、自分に余裕がないまま、あっという間に子どもが小学生になってしまったが、いろいろなママたちを見ている

と、「こういう叱り方もあるんだなあ」とか、「こういう褒め方があるんだ」と勉強になることが多い。

- ・ ママ同士、子供同士の交流を増やすことで、自分の子育てにもすごく前向きになれる。「2人目3人目はすごく大変そうだが、もう1人産みたい」と思えるような環境はすごく大事ではないか。
- ・ 「うちの子は今イヤイヤ期だから2人目なんて絶対無理」というふうに、一人で考えていると思いがちだが、2人の子どもを同時に子育てしているお母さんから「年子で大変だけどすごく楽しかった」という話を聞くこともある。「うちももう1人産みたい」と思ってもらうには、周りにそういう実例があって良いイメージを持てるとか、そういう話を実際に聞くということが重要だと思う。そういった輪が広がれば、2人目、3人目を産む母親はどんどん増えていくのではないか。
- ・ チェリッシュの取組など、私の身近なところでは、弟妹というのはしやすいというイメージがあり、少子化が進行しているというイメージが本当でない。毎年、誰かが妊娠しているので、世の中では本当に少子化が進んでいるのかというくらいの感覚を持っている。そう考えると、まずは1人目をいつのタイミングで授かるかということもあるが、周囲にそういう環境があることも大事なのではないか。

●須田紘彬部会長

- ・ 産み育てるところに行く前に結婚の話もある。交際中にどのタイミングで結婚に踏み出すのかということについて、私は今35歳だが、私の世代では30歳から35歳ぐらいで結婚する方が増えていて、20代の結婚が減っていると思う。今は仕事に集中したいからとか、まだ独身を謳歌したいからといった理由が多く、それぞれ、いろいろと楽しみにしていることはあると思うが、今のタイミングではないと考える方々の認識は漠然としていていると感じる。
- ・ 一方で、結婚したり子供がいないとわからない別の幸せもあるので、それはどっちが幸せかという議論ではなく、それぞれの人生においてロールモデルになるような姿、こういう場合はこうなんだという形で、結婚や出産をまだ経験したことがない方々に、我々は経験を伝えるべきなのではないかと思って、加藤委員の話を聞いていた。
- ・ 子育てにも関係する話として、通勤に関するコストについて少し触れたい。コロナの影響もあって、リモートワークや在宅勤務に関する社内の規定を整備する必要が高まっていると思うが、そういった働き方のところで、竹内委員から何かお話をいただけますか。

●竹内健二委員

- ・ 今こそ、働き方を変えていける好機であることは間違いないと思うが、これは従業員の方からは変えられないことで、企業のトップが意識を変えていかないといけない。

- ・ しかし、発想としては変えていかなければいけないが、実際には無理だと思ってる方が多く、世の中のデータとは相反する現場の直感的認識だと思う。そこをどれだけ深く入っていけるかが鍵になるのではないかな。
- ・ しかし、その「働き方」の前に、「生き残り」というテーマが、地域の企業にとっては今は先立つと思う。いかに行政、民間が横の連携をして、今の時期を乗り越えていくかが今は優先ではないか。そういったことを考えると、今、「働き方」と言うと、「いやちょっと待てよ」と、「その前にまず生き残りなんだ」ということが先に来てしまうので、「生き残り」という文脈の中で、次のステップとして、どうやって働き方を変えていければ、より生き残れるようになるのかという視点が重要になってくるのではないかな。「働き方」の前に、「生き残り方」の中で働き方を変えないといけないという話で、そういう施策のまとめ方のほうが、中小企業経営者、もしくは個人事業主には響く話ではないか。その辺りの施策の打ち出し方に注意が必要ではないかという感覚を今持っている。

●能登祐子委員

- ・ 子育て中の方たちに関係する話だが、託児所や放課後の児童の受け入れ先について、秋田県は民間の施設はあまり推奨していないのか。
- ・ 以前、学校から帰ってきた子供たちを、部活ではなく、習い事に送ったり、宿題を見てあげたり、そういうサポートをしたいという若者がいたが、そういった活動は認められなかったという話があった。託児所等も含めて、子ども、児童を短時間預かってくれる小規模な施設や活動を民間が行うことはとてもいいことではないかと思うのだが、県ではどのように考えているのか。

□信田 真弓 次世代・女性活躍支援課長

- ・ 資料の5ページの施策3のところの2つ目に、子供の居場所づくり促進事業について記載しているが、学校が終わってから、放課後、子供を預かる、或いは長期休業、夏休み冬休みの際に、朝から預かるという制度がある。
- ・ 運営者はどちらかというと公立が多いが、民営でも、社会福祉法人あるいは任意団体等が運営している場合もある。民間ではできないということはないが、現実的には個人の方では難しく、組織をきちんと作って制度に沿って運営していただくという形がよいのではないかと考える。民間でそういった業をできるかという御質問だと思うが、まったくできないというわけではなく、能代市の子育て支援の部署と情報共有し、何かできる方策もあるかもしれない。ただ、そういった活動の受け皿となるには条件等があり、どうしても地元の市町村が関係した話になるので、まずは地元市町村に御相談される方がよろしいかと思う。

●須田紘彬部会長

- ・まだ発言したい方もいるかと思うが、そろそろ定刻となるので本日は終了させていただきたい。事務局から何か連絡はあるか。

□事務局（佐々木主幹兼班長）

- ・部会の2回目の進め方についてですが、先ほどご説明した通り、この部会の一番大きい役割としては、次年度に向けて提言していただくということになるので、本日いただいた御意見を、事務局の方で整理してお示した上で、御意見を再度頂きたい。
- ・また、今日は限られた短い時間であったので、メールやファクス等で、随時、事務局の方に、言い足りなかった御意見などをお知らせください。
- ・また、こういう資料が欲しい、こういうことを聞きたいということも併せて、事務局に御連絡いただければ、準備する。
- ・次回は8月上旬を予定しているが、この部会が終わったあと、少し委員の方に残っていただき、日程調整をした上で決めたい。

●須田紘彬部会長

- ・他に御連絡のある方はいるか。
- ・議事は以上となるので、事務局に進行を返す。

□事務局（佐々木主幹兼班長）

- ・長時間にわたり、熱心に御審議を賜り、ありがとうございました。
- ・以上で、第1回ふるさと定着回帰部会を終了させていただく。

以上